

# *Paradise Lost* と *Paradise Regained* における 見張り天使伝承

——フェミニズムの視点から——

小 山 薫

## I

「見張り天使」とは旧約聖書外典・偽典に頻出する概念である。Neil Forsyth (ニール・フォーサイス) の *The Old Enemy: Satan and the Combat Myth* では “watcher angels” と表現されているが<sup>1)</sup>、単に “watchers” (あるいは “grigori”) とも呼ばれる。「見守る者」「寝ずの番人」という天使の機能が拡大され、エノク諸書や『ヨベル書』では、人間の娘たちの美貌に魅了され、彼女らに巨人たち（悪霊）を産ませて、やがてノアの洪水へとつながる悲惨をこの世にまねく、墮天使（〈神の息子たち〉である見張り天使のうち、本性から逸脱して、墮落した者）への言及に用いられている<sup>2)</sup>。

この〈見張り天使と人間の娘たち〉のエピソードは、創世記において「最も奇妙な逸話のひとつ」とされる第6章——“That the sons of God saw the daughters of men that they were fair; and they took them wives of all which they chose. . . . when the sons of God came in unto the daughters of men, and they bare children to them . . . ” (2, 4) ——に由来するが<sup>3)</sup>、この二つのエピソードはともに〈悪の起源を曖昧にするもの〉として危険視された<sup>4)</sup>。創世記の当該箇所についても “the sons of God” の身元をめぐって、カインの子孫である美女たちとの悪しき結婚を選んだ〈墮天使（見張り天使）説〉と〈セツの子孫説〉を主流に、ミルトン (John Milton) の時代まで続く長い神学論争へと発展した<sup>5)</sup>。

エノク伝承は紀元4世紀頃に人気が凋落し、1773年にエチオピアで写本が発見されるまで表舞台には上がらなかったものの、中世にも出まわっていたギリシア語版と、たぶん17世紀に出版されたラテン語版の紹介書を通して、ミルトンは関心をもったようである。たとえば、イタリアの古典学者スカリゲル (Joseph Scaliger) の編集によって、エノク諸書の一部が17世紀初頭に出版され、その影響でミルトンはエノク伝承の知識を得たのだろう、と推測されている<sup>6)</sup>。

そこで、これまでの主だった研究について確認したいが、まず McColley は “The Book of Enoch and *Paradise Lost*” と題する論文において *Paradise Lost* (PLと省略) と『エノク書』を丁寧に比較考察し、いくつもの類似点——たとえば、天使ウリエルが “regent of the universe” として機能する点；墮天使アザゼルがサタン軍の旗手となる点；墮天使たちが作戦会議する場面；PLではアダムに、『エノク書』ではエノクに、天使がヴィジョンを示す場面など——を指摘 (24, 30, 32, 38) した上で、 “The true Enoch is primarily a book of angelic revelations and visions, and although the point has been overlooked by Milton criticism, virtually half of *Paradise Lost* [sic] consists of vision and angelic revelation” (38) だと結論づけた。また McColley 以外に注目すべき研究としては、Allen の “Milton and the Sons of God”, West の “Milton’s Sons of God” および *Milton and the Angels*, さらに Ericson の “The Sons of God in *Paradise Lost* and *Paradise Regained*” などが挙げられるだろう。

ミルトンは PL 第11巻と *Paradise Regained* (PRと省略) 第2巻において、〈神の息子たちと人間の娘たち〉のエピソードに言及している。“watcher angel(s)” とか “watcher(s)” といった言葉が用いられているわけではないが、『エノク書』の見張り天使伝承は、とくに PR 第2巻において、サタンという媒体を通して要約されている。さらに PL では、第11巻のヴィジョンの場面において創世記第6章の問題箇所が再話されるだけでなく、作品のところどころで見張り天使伝承が暗示されている。上述した Allen, West, Ericson の論証はそれぞれに示唆に富み、学ぶ点が多いが、タイトルからも推測できるように、どれもみな “Sons of God” に焦点をあて、その身元確認を主眼にしたものである。

たとえば Allen は McColley (31) 同様, *PL* 第11巻については〈セツの子孫説〉を, *PR* 第2巻についてはエノク伝承の〈墮天使説〉をとった。その後 West が, *PL* 第11巻と *PR* 第2巻での “the sons of God” への言及を, ともに〈セツの子孫〉を意味すると断言し, かれの主張は “[His] deserved reputation as the definitive authority on Milton and the angels” を背景に受け入れられて, 絶対視される傾向をもったようだ (Ericson 79)。それに猛烈な反撃を加えて, *PR* 第2巻での〈墮天使（見張り天使）説〉を復活させたのが Ericson である<sup>7)</sup>。本稿ではこういった過去の研究をふまえた上で, とくにフェミニズムの視点をいかし, “daughters of men” に的をしぼって, *PL* と *PR* の関連箇所の再読・検討を試みたい。古代の見張り天使伝承がミルトンの意図に合わせて, いかに巧妙に文脈に取り入れられているかを確認する。それを手がかりに, かれの女性観の一面を再考したい。

## II

まず, *PL* 第11巻からみてみよう。アウグスティヌス (St. Augustine) によって確立された正統派の〈セツの子孫説〉<sup>8)</sup> がここでは明瞭に展開されている。導入部分は次のとおりである——

... on the hither side a different sort

From the high neighboring Hills, which was thir Seat,

Down to the Plain descended: by thir guise

Just men they seem'd, ...

.....  
... they on the Plain

Long had not walkt, when from the Tents behold

A Bevy of fair Women, richly gay

In Gems and wanton dress; to the Harp they sung

Soft amorous Ditties, and in dance came on:  
 The Men though grave, ey'd them, and let thir eyes  
 Rove without rein, till in the amorous Net  
 Fast caught, they lik'd, and each his liking chose;  
 And now of love they treat till th' Ev'ning Star  
 Love's Harbinger appear'd; then all in heat  
 They light the Nuptial Torch, and bid invoke  
*Hymen*, then first to marriage Rites invok't;  
 With Feast and Music all the Tents resound.<sup>9)</sup> (574-77, 580-92)

これは天使ミカエルによってアダムに示される、未来のヴィジョンの一部である。アダムはまずカインによるアベル殺害を、続いて多種多様の病気の苦しみと死の残酷さを見せつけられる。その後に示された「義人」(577) と「美女」(582) との結婚だけに、アダムは“more hope / Of peaceful days” [平和の日々への希望がある] (599-600) と好意的に解釈する。しかし恋歌や踊りにたけ、見張り天使伝承を彷彿とさせる華美な宝石と衣装<sup>10)</sup> で身を飾ったこの美女たちは、謹厳な男性さえ “in the amorous Net / Fast caught” [恋の網にしっかり捕える] (586-87) 典型的な遊び人である。

そこでミカエルは、次のようにアダムに警告する――

Those Tents thou saw'st so pleasant, were the Tents  
 Of wickedness, wherein shall dwell his Race  
 Who slew his Brother; . . .

.....

Yet they a beauteous offspring shall beget;  
 For that fair female Troop thou saw'st, that seem'd  
 Of Goddesses, so blithe, so smooth, so gay,  
 Yet empty of all good wherein consists

Woman's domestic honor and chief praise;  
 Bred only and completed to the taste  
 Of lustful appetence, to sing, to dance,  
 To dress, and troll the Tongue, and roll the Eye.  
 To these that sober Race of Men, whose lives  
 Religious titl'd them the Sons of God,  
 Shall yield up all thir virtue, all thir fame  
 Ignobly, to the trains and to the smiles  
 Of these fair Atheists, and now swim in joy,  
 (Erelong to swim at large) and laugh; for which  
 The world erelong a world of tears must weep. (607-09, 613-27)

つまりミカエルは、女神のように麗しいこの美女たちが、実は “his Race / Who slew his Brother” [弟を殺害した者の族] (608-09) カインの娘たちであり，“Bred only and completed to the taste / Of lustful appetence” [情欲のたしなみは完璧で、そのためだけに生まれてきた] (618-19) と解説するわけである。ミカエルのこの言葉には軽蔑と敵意が響いているが、それが女性嫌悪によるものだと判断するのは短絡的だろう。確かに、美女たちが “troll the Tongue, and roll the Eye” [歌うように舌を操り、目を転がす] (620) という恋の手管を駆使した結果、“that sober Race of Men, whose lives / Religious titl'd them the Sons of God” [信仰生活によって神の息子たちと称された、あの真面目な族] (621-22) が墮落に至る、と語られてはいる。しかし先に引用したこのエピソードの導入部分では、“The Men though grave, ey'd them, and let thir eyes / Rove without rein,” [謹厳だったものの、男たちは彼女たちを見つめ、無軌道に視線を泳がせた] (585-86) という男性側の積極的反応も明示されている (Cf. Turner 305)。まさに〈阿吽の呼吸〉とも呼ぶべき、この男女の眼と眼のやりとりが表現的に呼応していることは間違いない。PL 第9巻での、墮罪後のアダムとイヴによる流し目の交換<sup>11)</sup>を思わせる、第11巻のこの箇所は〈カインの娘たちが加害者、

セツの息子たちが被害者〉という単純な図式ではなく、堕落世界（つきつめれば、王政復古期の宮廷）にのさばる、退廃した男女双方へのミルトンの風刺<sup>12)</sup>と理解すべきであろう。「公認されているだけでも愛妾は一三人に及び、庶子の数は一四人にのぼる好色王」（森 119）とされるチャールズ二世と、その宮廷の自堕落な生活ぶりは『サミュエル・ピープスの日記』からも容易にうかがい知ることができる。そこでは、舞踏会の最中に身元不明の赤ん坊が産み落とされた、というセンセーショナルなエピソードを始め、当時の宮廷での〈梅毒の蔓延〉や〈安息日の賭博行為〉といった放埒が記録されている<sup>13)</sup>。ミルトン的見地からすると、これらの男女はまさに〈見張り天使伝承にたとえ得る、唾棄すべき悪徳集団〉だと言えるだろう。

さて，“Erelong to swim at large” [まもなく、たっぷり泳ぐことだろう] (626) と皮肉に予告される<sup>14)</sup>とおり、後に続くテクストがノアの洪水 (719-58) や巨人 (642)，エノク自身 (665-71, 700-09) にも言及する中で、ミカエルはアダムへの教育を続けて、こう述べる——

... These are the product  
Of those ill-mated Marriages thou saw'st;  
Where good with bad were matcht, who of themselves  
Abhor to join; and by imprudence mixt,  
Produce prodigious Births of body or mind.  
Such were these Giants, men of high renown;  
For in those days Might only shall be admir'd,  
And Valor and Heroic Virtue call'd;

.....

..., and for Glory done  
Of triumph, to be styl'd great Conquerors,  
Patrons of Mankind, Gods, and Sons of Gods, (683-90, 694-96)

ここで「巨人たち」は “the product / Of those ill-mated Marriages” [誤った結婚の産物] (683-84) だと明言されている。“by imprudence mixt, / Produce prodigious Births of body or mind” [軽率に入り混じったことで、肉体と精神を奇怪に誕生させた] (686-87) のが「この巨人たち」の発端であり、かれらは “for Glory done / Of triumph, to be styl'd . . . / . . . Sons of Gods” [勝利の栄光のために、神々の息子たちと称される] (694-96) と正体を暴露され、告発されて、堕落世界への憤懣の的になっている。

この箇所が *PL* 第3卷における愚者の樂園の描写と連動していることは自明だろう<sup>15)</sup>——

All th' unaccomplisht works of Nature's hand,  
 Abortive, monstrous, or unkindly mixt,  
 Dissolv'd on Earth, fleet hither, and in vain,  
 Till final dissolution, wander here,  
 Not in the neighboring Moon, as some have dream'd;  
 Those argent Fields more likely habitants,  
 Translated Saints, or middle Spirits hold  
 Betwixt th' Angelical and Human kind:  
 Hither of ill-join'd Sons and Daughters born  
 First from the ancient World those Giants came  
 With many a vain exploit, though then renown'd: (455-65)

ここでは “more likely habitants” [この場所の住人となりそうな人びと] (460) として、“Translated Saints, or middle Spirits hold / Betwixt th' Angelical and Human kind” [[エノクのように天国に] 移された聖人たちや、天使と人間の中間にいる靈たち] (461-62) が例にあげておる、 “Hither of ill-join'd Sons and Daughters born / First from the ancient World those Giants came / With many a vain exploit” [誤って結ばれた息子たちと娘たちから生まれ、最初に古代世界か

ら、あの巨人どもが多くの空しい手柄ともども、ここにやってきた】(463-65)と明言されている。ここでもエノク書（および見張り天使伝承）との関連は歴然としている (Cf. Allen 73; Turner 268)。

では次に、*PR* 第2巻における〈神の息子たちと人間の娘たち〉のエピソードをみてみよう。キリストを陥れるという難題を前にして、堕天使たちが作戦会議をする場面である。長くなるが、まとめて引用したい――

At his [Satan's] command; when from amidst them rose  
*Belial* the dissolutest Spirit that fell,  
The sensuallest, and after *Asmodai*  
The fleshliest Incubus, and thus advis'd.  
Set women in his eye and in his walk,  
Among daughters of men the fairest found;  
Many are in each Region passing fair  
As the noon Sky; more like to Goddesses  
Than Mortal Creatures, graceful and discreet,  
Expert in amorous Arts, enchanting tongues  
Persuasive, Virgin majesty with mild  
And sweet allay'd, yet terrible to approach,  
Skill'd to retire, and in retiring draw  
Hearts after them tangl'd in Amorous Nets.  
Such object hath the power to soft'n and tame  
Severest temper, smooth the rugged'st brow,  
Enerve, and with voluptuous hope dissolve,  
Draw out with credulous desire, and lead  
At will the manliest, resolutest breast,  
As the Magnetic hardest Iron draws.  
Women, when nothing else, beguil'd the heart

Of wisest *Solomon*, and made him build,  
And made him bow to the Gods of his Wives. (149-71)

サタンの求めに応じて提案の口火をきるベリアルは “the dissolutest Spirit that fell / The sensuallest, and after *Asmodai* / The fleshliest Incubus” [堕天使の中で最も放埒であり、アスモデウスに次いで好色、この上なく肉欲的な夢魔] (150-52) だと紹介される。この夢魔<sup>インキュバス</sup>という概念が見張り天使伝承に含まれることを、まず確認したい<sup>16)</sup>。また、ここでは “enchanting tongues” [魅惑的な口ぶり] (158) という表現で、*PL* 第11巻と同様、女性たちの言葉の巧みさが強調され、“Amorous Net” [恋の網] (162) というキーワードが再度使われている。すでに批評家に指摘されているとおり、“Virgin majesty with mild / And sweet allay'd, yet terrible to approach, / Skill'd to retire, and in retiring draw / Hearts after them” [処女の威厳が、優しさと愛らしさで和らいではいるが、近づくには恐ろしい。巧みに逃げ、逃げながら心を引きつける] (159-62) といった人間の娘たちへの記述が、*PL* でのイヴ描写と響きあっていることも明瞭である<sup>17)</sup>。

中でもとくに注目したいのは、“She [Eve] fair, divinely fair, fit Love for Gods, / Not terrible, though terror be in Love / And beauty” [彼女 [イヴ] は美しい、神々しく美しい。神々の愛人にもふさわしいほどだ。愛と美には恐れが伴うが、恐れてはならない] (*PL* 9: 489-91) というサタンの自戒の台詞である。エノク伝承の発達の過程で、見張り天使の愛の対象として、イヴに焦点があてられた経緯<sup>18)</sup>を思い出したい。

イヴを性的対象とする見張り天使の視線は、*PL* 第5巻の次の記述からも読みとれる——

... *Eve*

Undeckt, save with herself more lovely fair  
Than Wood-Nymph, or the fairest Goddess feign'd  
Of three that in Mount *Ida* naked strove,

Stood to entertain her guest from Heav'n; no veil  
 Shee needed, Virtue-proof, no thought infirm  
 Alter'd her cheek. ....

.....

... Meanwhile at Table *Eve*  
 Minister'd naked, and thir flowing cups  
 With pleasant liquors crown'd: O innocence  
 Deserving Paradise! if ever, then,  
 Then had the Sons of God excuse to have been  
 Enamour'd at that sight; but in those hearts  
 Love unlibidinous reign'd, nor jealousy  
 Was understood, the injur'd Lover's Hell. (379-85, 443-50)

ここでは天来の客ラファエルをもてなす、イヴの清らかな美しさが述べられているが、 “no veil / Shee needed” [彼女には、どんなベールも必要なかった] (383-84) という表現が、「女は天使たちのために、頭に力の印をかぶるべきです」という、コリントの信徒への手紙 1 (第11章10節) を示唆している点を確認したい。ウォーカーはこの聖句を解説して、「パウロが言わんとしたことは、女性の髪 hair に悪魔 *daemon* が誘われる、ということであった」と述べている (29)。さらに『イメージ・シンボル事典』による下記の報告も参照しよう——

魔力を阻止するために、ヘブライ人にめとられる異教徒の捕虜の女は、頭を剃り爪を切らねばならない (『申命記』 21, 12)。(……) 教会で女が頭髪をおおう理由の 1 つは、天使の中には人間の娘に異常な興味をもつものもいて、とくにこのような天使が教会にはたくさんいると考えられるからである。(ド・フリース 305, 307)

魔術においては、ベールを用いることは髪の毛をゆわえたり切ったり

するのと同じ働きをする。ベールは女性の魔力、とくに夫との関係における魔力を弱める。(ド・フリース 666)

つまり、女性の長い髪の毛は男性を誘惑する〈魔的なもの〉と考えられ、危険視されたわけである。しかし “as a veil down to the slender waist / Her unadorned golden tresses wore / Dishevell'd” [ほっそりしたウエストまでベールのように、飾らぬ金髪をたらした] (*PL* 4.304-06) と描写される、墮罪以前のイヴにかんする限り、魔力の介在はなかったことが意識的に確認されているのである<sup>19)</sup>。先にみた *PL* の人間の娘たちとは違って、イヴには宝石や衣装といった人為的な「飾りがなく」(5.380), “innocence / Deserving Paradise” [楽園にふさわしい無垢] (445-46) に輝く “naked” [裸身] (444) である。しかし “had the Sons of God excuse to have been / Enamour'd at that sight; but in those hearts / Love unlibidinous reign'd” [神の息子（墮天使）たちならば、この光景に魅了された弁解がたつにしても、この者たち（善天使）の心には、好色とは無縁の愛が支配していた] (447-49) という詩行の背後に、見張り天使伝承が存在することは明らかである (Cf. Turner 269-72; West, “Milton's Son's of God” 188-89)。

さて、このあたりで *PR* 第2巻に戻ろう。インキュバス 夢魔であるベリアルが提案した〈美女作戦〉は、サタンに一言のもと、はねつけられる——

To whom quick answer Satan thus return'd.  
*Belial*, in much uneven scale thou weigh'st  
 All others by thyself; because of old  
 Thou thyself dot'st on womankind, admiring  
 Thir shape, thir color, and attractive grace,  
 None are, thou think'st, but taken with such toys.  
 Before the Flood thou with thy lusty Crew,  
 False titl'd Sons of God, roaming the Earth  
 Cast wanton eyes on the daughters of men,

And coupl'd with them, and begot a race.  
 Have we not seen, or by relation heard,  
 In Courts and Regal Chambers how thou lurk'st,  
 In Wood or Grove by mossy Fountain side,  
 In Valley or Green Meadow, to waylay  
 Some beauty rare, *Calisto*, *Clymene*,  
*Daphne*, or *Semele*, *Antiopa*,  
 Or *Amymone*, *Syrinx*, many more  
 Too long, then lay'st thy scapes on names ador'd,  
*Apollo*, *Neptune*, *Jupiter*, or *Pan*,  
 Satyr, or Faun, or Silvan? . . . (172-91)

言葉どおりに読むと、ここで語られているのは、まぎれもない〈見張り天使伝承〉である—— “Before the Flood thou [*Belial*] with thy lusty Crew, / False titl'd Sons of God, roaming the Earth / Cast wanton eyes on the daughters of men / And coupl'd with them, and begot a race” [ノアの洪水の前に、お前〔ベリアル〕は神の息子たちと偽称し、情欲みなぎる仲間たちと共に地上をうろついては、ひとの娘たちにみだらな視線を投げかけ、彼女たちと結び合って、ある族をもうけた] (178-81) と述べられている。実はこの箇所について、批評家の意見が分かれてきたのは “False titl'd Sons of God” (179) の解釈である<sup>20)</sup>。始めにも述べたように(本稿 p.33), McColley も Allen も PR のこの箇所については〈墮天使説〉をとっているが、Allen はそれがサタンの言葉であることを強調して、ミルトンがわざと異端をサタンに語らせた、と主張した(76)。また一方 West は、PL, PR でミルトンが一貫して〈セツの子孫説〉をとったと断言し、その根拠として “False titl'd Sons of God” という表現にこだわった (“Milton's Sons of God” 189; *Angels* 130-31)。West はさらに、散文 *Of Reformation in England* に言及し、〈見張り天使説〉をとったユスティノスに対するミルトンの非難にも注目して、自説の裏づけにしている<sup>21)</sup>。

しかし、わたし自身は、“False titl'd” という表現にそれほどこだわる必要はない、と考える。墮天使（見張り天使）たちには「神の息子」と呼ばれる資格はない。だから「偽称」になる、という Ericson の見解（87）を全面的に支持したい。また、散文での議論を *PL*, *PR* にそのまま持ち込むことを危惧した Ericson の判断に賛同して、*Of Reformation* でのミルトンのユスティノス批判を過大視することを避けたい<sup>22)</sup>。これまでみてきたとおり、ミルトンは *PL* 第11巻では〈セツの子孫説〉を明示し、その他の箇所では〈見張り天使と人間の娘たち〉のモチーフを巧妙に文脈に織り込んだ。そして *PR* 第2巻では、夢魔ベリアルを用いて、（当時の人びとにとって）よりリアルに見張り天使伝承を再話したのである。その意図はなにか、という疑問が当然頭に浮かぶが、やはりそれは、王政復古期の退廃した宮廷文化への告発、だと考えるのが順当だろう（Cf. 本稿 pp.35-36）。だからこそミルトンは、*PR* 第2巻でのこのエピソードの最後に “Have we not seen, or by relation heard, / In Courts and Regal Chambers” [宮廷や王の私室でわれわれは目にしなかったか、話に聞かなかつたか] (182-83) として、パンやサテュロスといった森の神々を始めとした異教神が、夢魔や見張り天使と混同された経緯（Cf. 本稿n16）をつけ加えるのである。

## III

さて、*PL* と *PR* における見張り天使伝承への言及を跡づけたところで、そこにミルトンの女性観がどのように現れているかを考察したい。まず気がつくのは、先ほどみたサタンとベリアルのやりとりにおける明らかな女性嫌悪である。*PR* 第2巻で、女性美を語りながらもベリアルは、“Set women in his eye and in his walk” [女たちをキリストの目につく所、歩く所に置きなさい] (153) と提案し、“Such object hath the power to soft'n and tame / Severest temper . . . / . . . and lead / At will the manliest, resolutest breast” [そういう物には、厳格この上ない気性さえ軟化させ、飼いならす力があるのです（……）最も男らしい、決然とした心情さえ意のままにできるのです] (163-64, 166-67) と補足する。

また、それをうけたサタンは、“Thir shape, thir color, and attractive grace, / None are, thou think'st, but taken with such toys” [女たちの姿、顔色、魅力的な優美さ——そんなおもちゃに、どんな人間でも引きつけられずにはおれない、とお前は考えているのだな] (176-77) と言葉を返す。そして長い説教の後に、“Therefore with manlier objects we must try / His [Christ's] constancy” [だから、もっと男らしい物を使って、キリストの忠誠心を試すべきだ] (225-26) と締めくくるのである。女性美をめぐるベリアルとサタンのこの応酬が、女性を“object”[物]扱いし、ことさら「男らしさ」を吹聴していることは明白だ。しかしその女性嫌悪がミルトン自身の見解を反映しているわけではないことを、確認する必要があるだろう。先にも触れたように(本稿 pp.34-35), PL 第11巻のミカエルの言葉にさえ一見、女性への軽蔑と敵意に似た響きは感じられる。しかしそれは女性一般に対するものではなく、あくまで〈堕落した族<sup>やから</sup>、カインの娘たち〉への軽蔑であり、敵意であった。

ミカエルは、彼女たちとセツの子孫との悪しき結婚が人類にいかに悲惨を招くかを予告したが、そのときのアダムの反応は次のとおりである――

To whom thus *Adam* of short joy bereft.  
 O pity and shame, that they who to live well  
 Enter'd so fair, should turn aside to tread  
 Paths indirect, or in the mid way faint!  
 But still I see the tenor of Man's woe  
 Holds on the same, from Woman to begin.

From Man's effeminate slackness it begins,  
 Said th' Angel, who should better hold his place  
 By wisdom, and superior gifts receiv'd. (PL 11. 628-36)

ここでアダムが思わずもらした“the tenor of Man's woe / Holds on the same, from Woman to begin” [男の災いの進む道は同一だ。女から始まるのだ] (632-

33) という愚痴は、かれの弱さの表われ以外の何物でもない。もちろん、墮罪直後のアダムが陥ったヒステリックな女性嫌悪 (*PL* 10. 867-908) に比べれば、大きくパワーダウンしており、イヴへの怒りよりも、むしろ自分自身の不甲斐なさを思い、恥ずかしさにうち萎れたあげくの台詞、とも理解し得る。もっとも Turner はこの場面のアダムを評して、"Even in the process of reconciliation to Eve, Adam reveals an immature and thoughtless attitude that . . . should strike a chill in the reader" (306) と述べている。「ぞっと」はしないまでも、女性読者の多くがこのアダムの言葉に（多少なりとも）がっかりすることとは間違いないだろう。しかしミルトンは、この直後に "From Man's effeminate slackness it begins, / Said th' Angel" [男の女々しい、だらしなさから始まるのだ、と天使は言った] (634-35) という詩行をつけ加えた。つまり、アダムの暴言を天使ミカエルの言葉によって訂正し、〈男女の枠を越えた人間の弱さ〉への警告として再定義しているわけである。フォーサイスは、哲学者フィロン (Philo) が見張り天使伝承を「寓話化」し、「人間の娘たち」を「軟弱でめめしい情熱」 "the weakened, effeminate passions" と同一視した、と述べている (267; Forsyth 198)。フィロンの嫌悪の対象となった「女々しさ」という堕落の概念が、ミルトンの *PL* のこの文脈では〈男性であるアダム自身に帰属する弱さ〉として告発されていることに注目したい。新井明は、*Areopagitica* や *Of Reformation in England, Eikonoklastes* といった一連の散文作品や詩劇 *Samson Agonistes* を例証し、ミルトンが "effeminate" という概念を「女性一般のことを指して」ではなく、「自由にして見識ある ("knowing") 靈」をもたない未成熟な人間、「『成人』の資格のない人物 (……) 倫理的『弱点』をもった人物」一般を表わすために用いている、と明言しているが (『ミルトン』135, 170-72), 新井のこの解釈は、*PL* 第11巻の当該箇所を理解する上でも非常に有益である。〈墮落からの再生〉というプロセスの中で、ミルトンはアダムに狭義の性差意識を捨てるよう、意識改革をうながしている、と言えるだろう。「強さ」と同様、「弱さ」にも男女の区別などない、という認識である。女性だけが罪をかぶるフィロンの "effeminate" 観と比較すると、ミルトンのこの公平さは評

価し得るものである。

アウグスティヌスと同じく、たとえ理論的には排斥したとしても、古代の見張り天使伝承がミルトンの詩心に大きな刺激を与えたことは確実である。*PL* と *PR* で見張り天使伝承に言及することによって、ミルトンはかれ自身の時代の堕落社会と、そこに寄生する魔的で技巧的な男女関係を生きしく描いた。しかしそれは人間の娘たち一般への、かれ自身の嫌悪感を示すものではないことを再度強調したい。Joseph Wittreich の *Feminist Milton* が出版されてから、すでに十数年になるが、ミルトンと女性嫌悪を結びつける短絡的思考は、なおも広く一般に残存している。わたしたちは今一度、かれの作品の背後にある〈時代〉と〈社会〉を十分意識しつつ、ミルトンに対して公平に、かれの女性観を評価する必要があるのではないか。その上でやはり、*PL* でミルトンの描いたイヴは、アダムと同じように弱くて頼りなく、しかしまだ同時に、アダムと同じように強くて頼もしい、という判断に到達するのである。*PL* 第 4 卷で “Daughter of God and Man / accomplisht Eve” [神と人間との娘、完璧なイヴよ] (660) と無邪気なアダムに手放しで賞賛されたイヴが、墮罪と悔恨をへて絶望の中から立ち上がり、アダムと共に未来に希望をつないだとき、彼女は再びアダムに祝福されて、今度は “Mother of all Mankind, / Mother of all things living” [全人類の母、生ける万物の母] (11.159-60) と呼びかけられる——そこにミルトンの描いたイヴの、そしてアダムとイヴという男女の、成長の道を読みとりたい。

## 註

本稿は、日本ミルトン・センター第28回研究大会（2002年10月19日、同志社女子大学）において、シンポジウム「ミルトンと古代世界」のパネラーのひとりとして口頭発表した、「ミルトンと見張り天使伝承——*PL* と *PR* における〈神の息子たちと人間の娘たち〉をめぐって」の原稿をもとに、さらに資料を加え、加筆、修正したものである。

- 1) 見張り天使に関心をもった発端は、Forsyth の当該書の共訳にたずさわったことがある。本稿では主に訳書（フォーサイス『古代悪魔学』）を参照するが、必要に

応じて英語を引用する場合には、原著を用いる。

- 2) 見張り天使についてはフォーサイス（とくに第7-12, 20章）に詳述されているが、その他にも Davidson 311-12；グイリー『天使と精霊の事典』93-96, 202-03；ゴスマン29-30などを参照。エノク諸書と『ヨベル書』については上記の他、村岡 15-22, 161-70, 342；木田、山内、土岐248-49なども参照。

なお、フォーサイスによると、エノク書は当初アラム語で書かれたが、残存するのは文書断片のみらしい。現在入手できる唯一の「もともとのエノク諸書の完全なテクスト」は、エチオピア語版（紀元4世紀頃に編纂？）の『エノク書』（『第1エノク書』）となる。エノク諸書には「エノクの旅」「エノクの幻」「エノクの天文学書」「見張りの書」「巨人の書」「エノクの夢」「エノク書簡」「エノクのたとえ話」（ほぼ成立年代順）などが含まれ、紀元前3世紀頃から（遅くとも）紀元1世紀にかけて順次完成したようだ。「見張りの書」はエチオピア語版『エノク書』では第1-36章にあたる。「見張りの書」自体は紀元前3世紀末に編纂されたが、「より古い資料を（……）中心部分に組み入れていることは明らか」だという（219-21; 669n4）。Cf. 村岡 3-5, 162-64。

- 3) シュミット 28. Cf. 村岡 167, 342; フォーサイス 206-07, 222；グイリー『天使と精霊の事典』93-94.

- 4) Cf. 「『創世記』から生まれたこれらの物語 [見張り天使と人間の娘たちのエピソード] はキリスト教の伝統の中で、天使の墮落を人間の創造以前に置く、惡の起源の第二の神話と交差している」（シュミット 30）；“the episode that became the principal myth of the origin of Evil in pre-Christian times—the fatal coupling of male angels and female humans in Genesis 6:1-2”（Turner 20）；“In some Hebrew scriptures, . . . the original fall occurs when the angels ('Sons of God') make love to the daughters of men and beget giants on them; a fragment of this story survives in Genesis 6:1-2”（Turner 268）；「この物語 [創世記第6章] では、食べることよりも性交のほうが、神の領域と人間の領域とのあいだの境界が破られる方法である」（ニューサム、リンク 35）；フォーサイス 224-25, 466-69；Ericson 88.

なお、天使に関する資料の宝庫であり、新約聖書（ユダの手紙 14-15節）にも引用されるほど、影響力のあったエノク諸書が聖書偽典とされたのはヒエロニムスの権威によるらしい（グイリー『天使と精霊の事典』61, 102）。

- 5) Allen 74-76; Ericson 79, 88. Cf. Turner 126；グイリー『天使と精霊の事典』94；エヴリー 74.

- 6) フォーサイス 669n4; McColley 21-24, 34-39; Allen 76-79.

Cf. グイリー『天使と精霊の事典』61。

なおミルトンへの影響の源泉としては、McColley はシンセルス（George

Synclus) を, Allen はエウティシウス (Eutychius) を挙げている。

- 7) Ericson は West の論証を入念に検証し, 論旨の曖昧な点をみつけては猛烈な反論を加えて, “[West] Having disposed to his own satisfaction of any link between fallen angels and Genesis 6” (86) とまで大胆発言している。手厳しすぎて West が気の毒になる箇所もあるが, 論文全体としては, 非常に鋭い, 説得力のあるものだと判断し, 支持したい。
- 8) Cf. “Augustine’s reading was authoritative in the seventeenth century among both Protestants and Catholics” (West, *Angels* 129).
- 9) Hughes ed., *John Milton: Complete Poems and Major Prose* 446. ミルトンの英詩の引用はすべてこの版を用いる。なお, ミルトンの詩の引用にひき続き [ ] づけで和訳を提示する場合は, わたしが直訳したもの用いるが, 新井訳, 平井訳, 才野訳を参照させていただいた。
- 10) 『エノク書』では, 「女性の装飾の秘密——さまざまな種類の宝石や化粧品, ことにアイシャドウ」(フォーサイス 286) は見張り天使アサエル (アザゼル) によって伝授される。Cf. フォーサイス 233-35, 285-90; 村岡 177, 277。
- 11)
 

... but that false Fruit  
 Far other operation first display’d,  
 Carnal desire inflaming, hee [Adam] on Eve  
 Began to cast lascivious Eyes, she him  
 As wantonly repaid; in Lust they burn:  
 Till Adam thus ’gan Eve to dalliance move. (1011-16)

ちなみに, 小山10-13では, この場面での夢魔のイメージについて述べた。
- 12) *PL* と *PR* の中でミルトンが, 王政復古期の退廃した宮廷文化を風刺している点については, すでに多くの研究者の興味深い指摘がある。  
 Cf. “Did he [Milton] develop this fallen angel [Belial] to express the moral dangers of the Restoration court?” (Hunter 8); “The same character actor who might play Charles II or any foppish courtier might also play Belial with no fundamental change in expression or mannerism” (Flannagan 9); “the jealousy and ‘fierce desire’ of Satan, the demonic copulator and Courtly Amorist” (Turner 271); Turner 304-05; Fowler 636n.
- 13) Cf. 「そこ [宮廷] では梅毒はあたり前のこと, わたしもあちらこちらで耳にすることだが, 食べたり, 悪態をついたりすることと同じくらいあたり前のことなのだ」(ピープス 2: 192-93)。〈舞踏会での出産〉のエピソードについては 4: 54-55 を, 〈安息日の賭博行為〉については 8: 49-51 を参照。  
 なお, 当時の宮廷女性のしたたかな「手練手管」「火遊びぶり」については, 森

139-41も興味深い。

- 14) ノアの洪水への皮肉は、*PL* の他の箇所にもある。Cf. “*Belial*, flown with insolence and wine” (1. 502); “How didst thou grieve then, *Adam*, to behold / The end of all thy Offspring, end so sad, / Depopulation; thee another Flood, / Of tears and sorrow a Flood thee also drown’d, / And sunk thee as thy Sons” (11. 754-58). Cf. Fowler 632n; Hughes 447n.
- 15) Cf. Fowler 194-95n; Hughes 269n. なお Fowler は、*PL* 第3卷での愚者の樂園の描写について、 “Satiric analogues include the attacks on intellectual folly by the Royalist bishop John Wilkins” という注をつけている (194n)。
- 16) 夢魔と見張り天使伝承の関連については、フォーサイス 287-88, 425-26；グイリー『天使と精靈の事典』23-24；小山 1-20などを参照。  
なお夢魔については、アウグスティヌスも『神の国』で容認していたようだ。 Cf. 「森の神シルヴァヌスや牧神パンたちは一般に夢魔と呼ばれているが、彼らはしばしば婦人に対して卑劣な行為に出て、彼女たちと交わることを欲し、その欲望を遂げたのである」(85); Carey 449n; シュミット 78; MacKellar 114; Hughes 497n.
- 17) Flannagan 10; Turner 302; Carey 449n; MacKellar 115.  
Cf. “the Virgin Majesty of *Eve*” (*PL* 9: 270); *PL* 8: 500-510.
- 18) Cf. フォーサイス, 第12章1「見張り天使とエバ」(298-301)。フォーサイス (300) は、「[ガドリール] はエバを横道にそれさせ（誘惑し），人の子らに死の武器すなわち殺戮のための楯と胸当てと剣を見せた」という「エノクのたとえ話」の一節を紹介している。  
さらに、サタンのイヴへの性的誘惑については、フォーサイス 310-20, 437-39などを参照のこと。Cf. 「エバは蛇—悪魔に誘惑され，その結果がカインだった。しかし，セツはアダムの息子であり，この『種』の違いはかれらの子孫に反映され続けた。姦淫によるカインの誕生はタルグムに出てくるし，新約聖書にも暗示されているし，グノーシス主義の文脈にもよく出てくる」(フォーサイス314-15)。
- 19) この場面にかんする Turner の見解はもっと複雑である。Cf. “Milton is apparently fascinated by the paradox of the veil that hides and reveals at once, simultaneously enhancing innocence and desirability” (Turner 269).
- 20) Cf. Carey 450n; MacKellar 117; Hughes 498n.
- 21) West, Angels 129, 202n. なお、*Of Reformation in England* におけるミルトンのユスティノス非難については、新井，原田，田中による下記の翻訳を参照したい——  
しかしいまわしい誤謬，聖書についての笑止千万なこじつけ，異端，虚栄などは，殉教者ユスティノス，クレメンス，オリゲネス，テルトゥリアヌス，その他，古代思想家たちの書物のいたるところにみられるものであつ

て、これを知らない人はいますまい。「天使たちは」——『創世記』では「神の子たち」と解さるべきもの——「女たちと交わり悪魔たちを生んだ」などということをのべる人物が、ローマ元老院にたいしてキリスト教信仰の弁護論を書くに適した人物と考えられるでしょうか。(『イングランド宗教改革論』35)

- 22) Ericson の主張は次のとおりである――

... one should remember that Milton did not continue to hold in his maturity many points which he made in the early antiprelatical tracts, including his primary assumption in them that the presbyterian form of church government was the correct, biblical teaching on the subject. Milton's views were not static; some of them changed as he grew older. (85)

Cf. Ericson 81-82, 87-89.

なお、Turner も PR での〈墮天使説〉を当然視している (20, 268-69)。

### 参考文献

- Allen, Don Cameron. "Milton and the Sons of God." *Modern Language Notes* 61.2 (1946): 73-79.
- 新井明訳. 『ミルトン 楽園の回復・闘技士サムソン』. ジョン・ミルトン [Milton, John] 著. 東京: 大修館, 1982. Trans. of *Paradise Regained* and *Samson Agonistes*.
- 訳. 『ミルトン 楽園の喪失』. ジョン・ミルトン [Milton, John] 著. 東京: 大修館, 1983 ed. Trans. of *Paradise Lost*.
- . 『ミルトン』. 東京: 清水書院, 1997. 人と思想 134.
- 新井明, 原田純, 田中浩 共訳. 『イングランド宗教改革論』. ジョン・ミルトン [Milton, John] 著. 東京: 未来社, 1976. Trans. of *Of Reformation in England*.
- アウグスティヌス [St. Augustine] 著. 大島春子, 岡野昌雄 共訳. 『アウグスティヌス著作集』. Vol. 14. 『神の国』 4. 東京: 教文館, 1994.
- Authorized King James Version of the Holy Bible.
- ジョン・ボウカー [Bowker, John] 編著. 荒井献, 池田裕, 井谷嘉男 監訳. 『聖書百科全書』. 東京: 三省堂, 2000. Trans. of *The Complete Bible Handbook*.
- Carey, John ed. *John Milton: Complete Shorter Poems*. 2nd ed. London: Longman, 1997.
- Davidson, Gustav. *A Dictionary of Angels Including the Fallen Angels*. New York: The Free Press, 1967.
- アト・ド・フリース [De Vries, Ad] 著. 山下主一郎 他訳. 『イメージ・シンボル事

- 典』。東京：大修館，1984。Trans. of *Dictionary of Symbols and Imagery*。  
 ジョージ・エヴリー [Every, George] 著。今井正浩訳。『キリスト教の神話伝説』。  
 東京：青土社，1994。Trans. of *Christian Legends*。
- Ericson, Edward E. Jr. "The Sons of God in *Paradise Lost* and *Paradise Regained*." *Milton Quarterly* 25.3 (1991): 79-89.
- Flannagan, Roy. "Belial and 'Effeminate Slackness' in *Paradise Lost* and *Paradise Regained*." *Milton Quarterly* 19.1 (1985): 9-11.
- Forsyth, Neil. *The Old Enemy: Satan and the Combat Myth*. Princeton: Princeton UP, 1987.
- [ニール・フォーサイス] 著。野呂有子監訳。倉恒澄子、小山薰、田中洋子、圓月勝博共訳。『古代悪魔学——サタンと闘争神話』。東京：法政大学出版局，2001。叢書ウニベルシタス 725。Trans. of *The Old Enemy: Satan and the Combat Myth*.
- Fowler, Alastair ed. *John Milton: Paradise Lost*. 2nd ed. London: Longman, 1998.
- Frymer-Kensky, Tikva. "Daughters of Men, Wives of the Sons of God." *Women in Scripture: A Dictionary of Named and Unnamed Women in the Hebrew Bible, the Apocryphal / Deuterocanonical Books, and the New Testament*. Ed. Carol Meyers, et. al. Boston: Houghton Mifflin Company, 2000. 176-77.
- エリザベート・ゴスマン [Gössmann, Elisabeth] 他編。エリザベート・ゴスマン、岡野治子、荒井献監訳。『女性の視点によるキリスト教神学事典』。東京：日本基督教団出版局，1998。Trans. of *Wörterbuch der Feministischen Theologie*.
- ローズマリ・エレン・グイリー [Guiley, Rosemary Ellen] 著。荒木正純、松田英他訳。『魔女と魔術の事典』。東京：原書房，1996。Trans. of *The Encyclopedia of Witches and Witchcraft*.
- 著。大出健訳。『天使と精霊の事典』。東京：原書房，1998。Trans. of *Encyclopedia of Angels*.
- 平井正穂訳。『失樂園』。ジョン・ミルトン [Milton, John] 著。上・下巻。東京：岩波書店，1981。Trans. of *Paradise Lost*.
- Hughes, Merritt Y., ed. *John Milton: Complete Poems and Major Prose*. Indianapolis: Odyssey, 1957.
- Hunter, William B. "Belial's Presence in *Paradise Lost*." *Milton Quarterly* 19.1 (1985): 7-9.
- 木田献一、山内眞、土岐健治共編。『聖書の世界・総解説』。東京：自由国民社，1991。
- 小山薰。「*Paradise Lost* における Eve の悪夢再考——不思議な "Guide" をめぐつ

- て」。『同志社女子大学 学術研究年報』52.1 (2001) : 1-20.
- Lockwood, Laura E., ed. *Lexicon to the English Poetical Works of John Milton*. New York: Macmillan, 1907.
- MacKellar, Walter. *A Variorum Commentary on the Poems of John Milton*. Vol.4. London: Routledge & Kegan Paul, 1975.
- McColley, Grant. "The Book of Enoch and *Paradise Lost*." *The Harvard Theological Review*. 31.1 (1938): 21-39.
- 村岡崇光 訳・概説. 『聖書外典偽典4——旧約偽典Ⅱ』. ヨベル書, エチオピア語エノク書. 日本聖書学研究所編. 東京: 教文館, 1975.
- 森護. 『英国王と愛人たち——英国王室史夜話』. 東京: 河出書房新社, 1991.
- C·A·ニューサム [Newsom, Carol A.], S·H·リンジ [Ringe, Sharon H.] 共編. 荒井章三, 山内一郎 日本語版監修. 加藤明子, 小野功生, 鈴木元子 共訳. 『女性たちの聖書注解——女性の視点で読む旧約・新約・外典の世界』. 東京: 新教出版社, 1998. Trans. of *The Women's Bible Commentary*.
- The Oxford English Dictionary (OED)*. 2nd ed. On Compact Disc.
- Patterson, Frank Allen and French Rowe Fogle, eds. *An Index to the Columbia Edition of the Works of John Milton*. 2 vols. New York: Columbia UP, 1940.
- サミュエル・ピーパス [Pepys, Samuel] 著. 白田昭訳. 『サミュエル・ピーパスの日記』. Vols. 1-6. 東京: 国文社, 1987-90. Trans. of *The Diary of Samuel Pepys*. ——著. 白田昭, 岡照雄, 海保眞夫 共訳. 『サミュエル・ピーパスの日記』. Vol. 8. 東京: 国文社, 1999.
- 才野重雄 訳. 『ミルトン詩集』. 東京: 篠崎書林, 1976.
- ジャン=クロード・シュミット [Schmitt, Jean-Claude] 著. 松村剛訳. 『中世の迷信』. 東京: 白水社, 1998. Trans. of "Les Superstitions." *Histoire de la France religieuse*.
- 『聖書』. 新共同訳 旧約聖書続編つき. 東京: 日本聖書協会, 1993 ed.
- Turner, James Grantham. *One Flesh: Paradisal Marriage and Sexual Relations in the Age of Milton*. 1987. Oxford: Clarendon Press, 1993.
- バーバラ・ウォーカー [Walker, Barbara G.] 著. 山下主一郎 他訳. 『神話・伝承事典——失われた女神たちの復権』. 東京: 大修館, 1988. Trans. of *The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets*.
- West, Robert H. "Milton's Sons of God." *Modern Language Notes* 65 (1950): 187-91.
- . *Milton and the Angels*. Athens: U of Georgia P, 1955.
- Wittreich, Joseph. *Feminist Milton*. Ithaca: Cornell UP, 1987.